

大阪市立自然史博物館

ミニガイドNo.3



けものの

歯

も く じ

1. 歯とは	1
2. 歯の種類と数	1
3. 歯ははえかわる	3
4. 歯のなかみ	4
5. 歯の形と食べ物	6
ヒミズ	8
コキクガシラコウモリ	10
ニホンザル	12
クマネズミ	14
スミスネズミ	16

ノウサギ	18
イワシクジラ	20
シャチ	22
ライオン	24
イヌ	26
ヒグマ	28
オットセイ	30
マンモスゾウ	32
ウマ	34
イノシシ	36
ウシ	38

1. 歯とは

私^{わたし}たちにとって歯とは何でしょう。だれでも気がつくように、歯とは「口の中にある、かたい、食べ物をかみくだくための器^き管^{かん}」です。肉^{しよく}食^じのけもの^ぼの場合^{あい}には、えものをとらえてころす役^{やく}わりも大切です。

私^{わたし}たちがおしゃべりする時^{とき}にも、歯は大切なはたらきをしています。歯がないと空^{くわ}気がもれて、うまくしゃべれません。

2. 歯の種類と数

口^{くち}をあけて、鏡^{かがみ}で自分の歯をみてみましょう。どんな形の歯が何本はえていますか。ヒトの歯は0才の時からはえはじめ、3才までには上下あわせて、20本の歯がはえそろうます。これらを乳^{にゆうし}歯とよんでいます。乳^{にゆうし}歯は、6才くらいから次々とぬけて、かわりの歯がはえます。これらを代^{だいせいし}生^{せい}歯と言^いいます。そして6才くらいから、乳^お歯の奥^{おく}には、大きな大^{だい}白^{はく}歯^しが上下左右で合計12本つけ加^{くわ}わります。

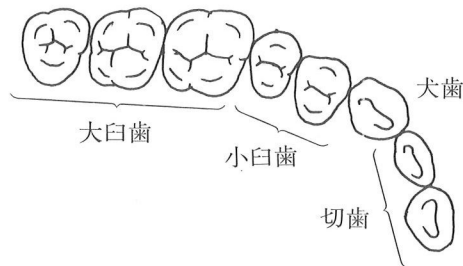
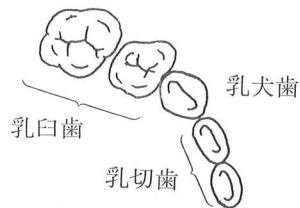


図1：ヒトの乳^{にゆうし}歯と永^{えい}久^{きゆう}歯 (右上あご)

代生歯と大白歯は、はえてから年をとるまでずっと使われるので、永久歯ともよばれます。永久歯は全部そろると32本になります。しかし、いちばん奥の歯がはえない人や、はえても正しくはえなくて、ぬかなければならない人が大ぜいいます。大人でも全部で28本という人も多いでしょう。

こんどは歯の形を見てみましょう。いちばんまんなかには、上下のあごにそれぞれ4本(合計8本)の、うすくてノミのようにするどい切歯が見えます。その両側に並んでいるのは、するどくとがった犬歯です。犬歯の奥には奥歯(臼歯)がつづいています。奥歯は2つかそれ以上のこぶが並んだような形をしています。奥歯は乳歯では8本(乳臼歯)、永久歯では20本あります。永久歯のうち、前の8本は後の12本より小さいので、小白歯といえます。小白歯は乳臼歯のかわりにはえる歯ですが、普通ふたつのこぶが集ったような形をしていて、乳臼歯には、似ていません。乳臼歯は、大白歯によく似ています。

いろいろな形の歯があるのは、私たちが食べ物を食べる時に、それぞれちがうはたらきを、うけもっているからです。切歯はかみ切る、犬歯はひきさく、臼歯はかみくだきすりつぶすはたらきをしています。

ヒト以外のほとんどのけものでも、切歯・犬歯・臼歯の区別ができます。はえる場所によって、歯の形とはたらきがちがっていることは、けものの特徴です。魚や爬虫類など、ほかの動物の場合は、単純な同じ形の歯がずらりと並んでいるのが普通です。ただし、け

ものでも、イルカやマッコウクジラなど^{はくじらるい}歯鯨類の場合は、ほとんど同じ^{えんすいけい}円錐形の歯がたくさん並んでいます。

切歯や臼歯の数は、けもの種類ごとに、だいたい決っています。ヒトの永久歯の場合は、上下・左右のあごに、それぞれ切歯が2本、犬歯が1本、小臼歯が2本、犬臼歯が3本で合計32本です。これを $I \frac{2}{2} C \frac{1}{1} P \frac{2}{2} M \frac{3}{3} = 32$ と書き^{ししき}歯式とよびます。I・C・P・Mは、それぞれ切歯・犬歯・小臼歯・大臼歯をあらわします。線の上と下は、^{うわあご}上顎と^{したあご}下顎の歯の数の半分です。もっとかたんに、 $\frac{2 \cdot 1 \cdot 2 \cdot 3}{2 \cdot 1 \cdot 2 \cdot 3}$ と書くこともあります。イヌの永久歯は $\frac{3 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 2}{3 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 3}$ であらわされます。

3. 歯ははえかわる

しっかりはえていた歯がはえかわる時になると、グラグラして、^{さいご}最後には手でぬけるくらいになるのはなぜでしょう。いちど、ぬけた歯をよく^{かんさつ}観察して下さい。ぬけてしまった乳歯には、ほとんど根がないことに気がつくでしょう。じつは、代生歯が乳歯の下からはえはじめるところになると、それまでしっかり乳歯をささえていた根が、^{きゅうしゅう}吸収されて、なくなってしまうのです。とてもうまくできていると思いませんか。

では、なぜ歯ははえかわるのでしょうか。歯は使うと、すりへってしまうので、かわりが^{ひつよう}必要であることもたしかです。ぬけた乳歯をみると、とてもすりへっています。また、体

の成長せいちようと関係かんけいがあるとも考えられます。私たちが生れた時は小さな体です。あごも小さくできています。体が大きくなるにしたがって、あごつまりあごの骨ほねも大きくなります。しかし、歯はいちど作られると、その大きさは変わりません。だから、歯がはえかわらないと、あごの大きさと、つりあいがとれなくなってしまいます。そこで乳歯より大きい代生歯に、はえかわります。それでも、あごの成長にはおいつかないので、奥に大白歯がつけ加わるのでしょう。

体のほかの部分も同じですが、あごも使えば使うほど、りっぱになります。現代人げんだいじんは、料理りょうりの方法ほうほうが発達はつたつしたので、食べ物をあまりかまなくてもよくなりました。そのため、大昔おおむかしの人に比べて、あごが小さくなっています。一番奥の歯、つまり第3大白歯（親知らず）がはえなかったり、変へんなはえ方をして歯医者でぬいてもらわなければならなくなるのは、そのためです。乳歯がはえている時に、よく食べ物をかまないと、あごが十分大きくなりません。そうすると、せっかくの大きな代生歯がはえる時に、あごの大きさがたりなくて、代生歯のはえ方がおかしくなる（歯ならびがわるくなる）ことがあります。

4. 歯のなかみ

私たちの歯では、歯ぐきより上に出ていて、口をあければ見える部分を、歯冠しかんといいます。そして、あごの中うちにあって、歯冠をささえているのが歯根しこんです。

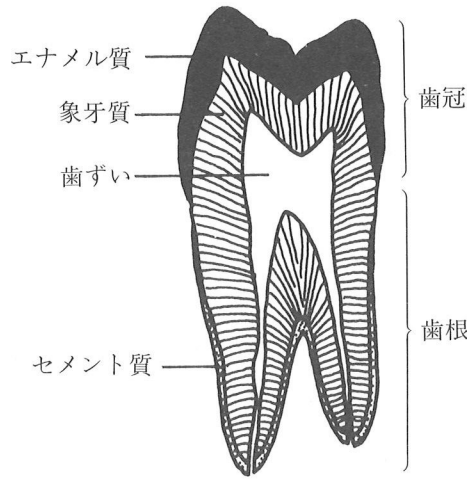


図2：ヒトの^{だいきゆうし}大臼歯の^{だんめん}断面

歯冠のいちばん外側は、エナメル質^{しつ}とよばれ、^{はんとう}半透明^{めい}で、かたい歯の中でも、いちばんかたくできています。

象牙質^{ぞうげしつ}は、少し^き黄色みがかかった色で、エナメル質ほどではありませんが、やはりかたい^{そしき}組織です。そして、エナメル質よりじょうぶな（かけにくい）性質をもっています。象牙質^{きば}という名は、象の牙^{きば}からつけられたものです。ヒトの象牙質は、象の牙と同じ組織からできているということです。

ヒトの歯では、セメント質は歯根の部分にしかみられません。しかし、^{そうじよく}草食のけもの多くでは、歯冠の部分つまりエナメル質の上にも、セメント質がみられます。これを歯冠セメントといいます。

歯髄^しには、歯がはえている時には、^{しんけい}神経や^{けつかん}血管が入っています。虫歯になって「神経をぬく」というのは、この歯髄を取ってしまうことです。私たちが、手にとって見ることのできる歯の標本では、^{くう}ふつう歯髄は、なくなっています。歯髄がなくなったあとの、あいた部分は、歯髄腔^{くう}といいます。

5. 歯の形と食べ物

けものの歯の形は、その食べ物と、とても深いつながりがあります。肉食性、草食性、

^{ざっしよくせい}雑食性と、大きく3つに分けてみると次のようになります。

①肉食性のけものの歯

歯はよくとがっていて、肉をかみ切ったり、骨をかみくだいたりするのに、つごうのよい形をしています。犬歯の大きい種類が多くみられます。犬歯は、えものをとらえる時や、^{てき}敵とたたかう時の、大切な武器だからです。

②草食性のけものの歯

臼歯は、広いかみあわせの面（^{こうごうめん}咬合面）を、もっています。歯がすりへると、咬合面では、かたいエナメル質がとび出します。そして、上下の歯のエナメル質がすれあうことによって、臼の^{うす}ように草をすりつぶすはたらきをしています。一部の種類をのぞくと、犬歯の発達は、よくありません。

③^{ざっしよくせい}雑食性のけものの歯

草食性のけものと、肉食性のけものの歯の、中間の形をしています。臼歯は、とがらず、小さなこぶをならべたような形です。草をすりつぶす、臼のようにはなっていません。

食べ物のちがいは、歯の形だけでなく、あご^{かんせつ}関節の形のちがいにも、あらわれています。肉食性のけものあごは、ちょうどはさみのように、下あごを開き、とじるという、動き

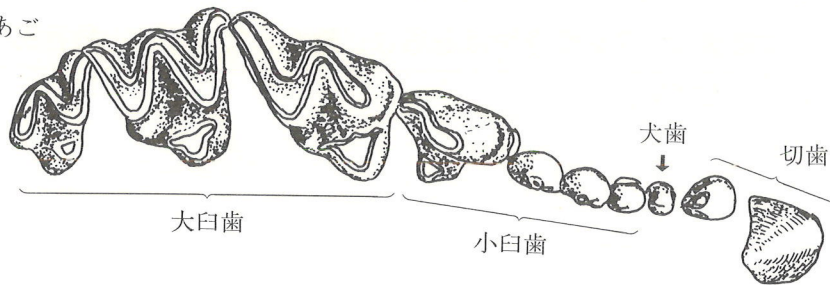
方をします。ところが草食性のけものは、草をすりつぶさなければなりませんから、単純^{たんじゆん}に口を、あけしめしてもだめです。下あごは上あごに対し、前後・左右に動くようになっています。ゾウは前後に、ウシやウマは左右に、動かしています。動物園へ行った時には、よく見て確か^{たし}めてください。

このあとのページにのせた、けものの歯の図は、とくに書いてあるものをのぞくと、すべて右上あごと右下あごの永久歯で、咬合面（かみあわせの面）から見たものです。つまり、上あごの歯は下から、下あごの歯は上から見たこととなります。そして図の右側が前^{とうこつ}になります。頭骨の図は、全部、右横から見たものです。

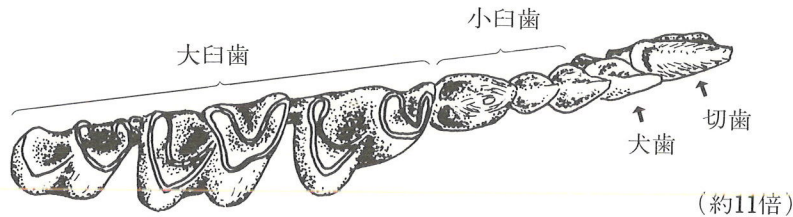
ヒミズ しよくちゆうもく (食虫目) ミミズや昆虫など小動物を食べる

歯式 $\frac{2 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 3}{1 \cdot 1 \cdot 3 \cdot 3}$

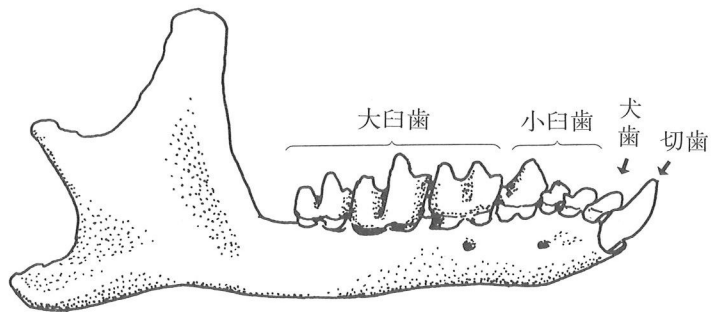
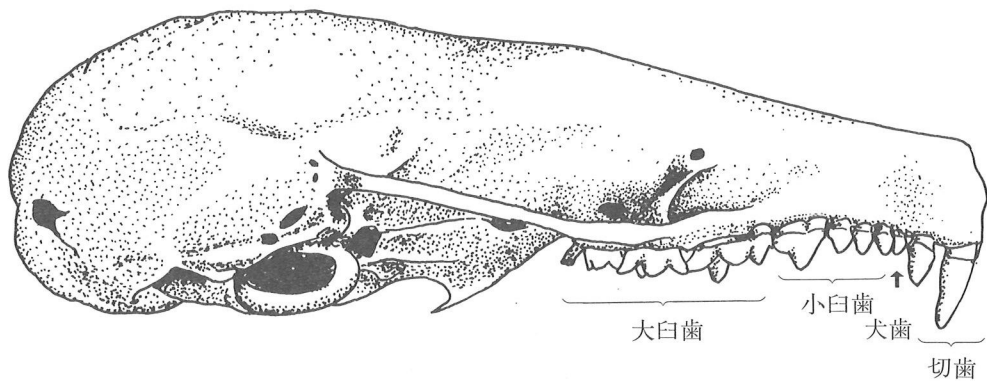
右上あご



右下あご



モグラに似た動物で、ちひよう あさ ちちゆう地表や浅い地中で、ミミズなどを食べて生活しています。せつし切歯は大きく、するどくて、えものをとらえるのに適しています。てき白歯はよくとがっていて、えものを切りさくのに使われます。

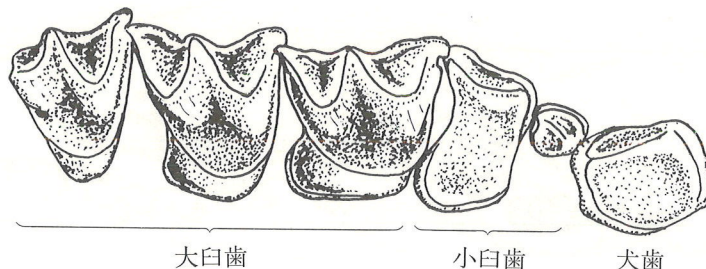


(約5倍)

コキクガシラコウモリ よくしゆもく (翼手目) 虫を食べる

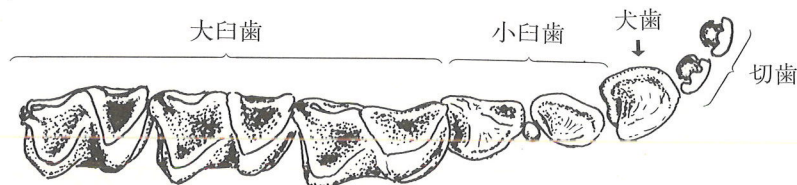
歯式 $\frac{1 \cdot 1 \cdot 2 \cdot 3}{2 \cdot 1 \cdot 3 \cdot 3}$

右上あご



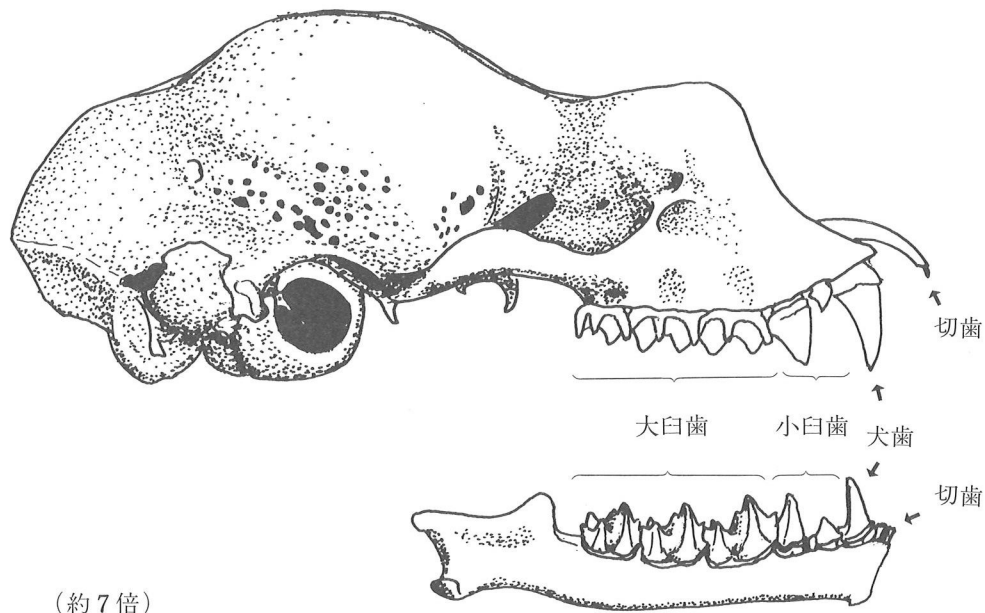
切歯
↓
𪗇

右下あご



(約15倍)

と飛びながら、虫をとらえて食べています。昆虫のかたいキチン質しつがいこつかくの外骨格を、かみくだくために、大きくて、するどい臼歯をもっています。

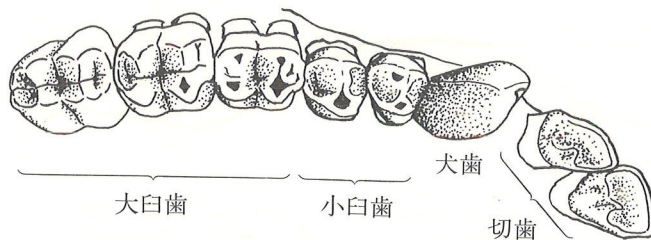


(約7倍)

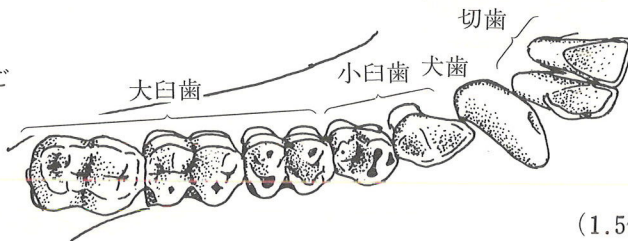
ニホンザル れいちようもく (霊長目) 何でも食べる

歯式 $\frac{2 \cdot 1 \cdot 2 \cdot 3}{2 \cdot 1 \cdot 2 \cdot 3}$

右上あご

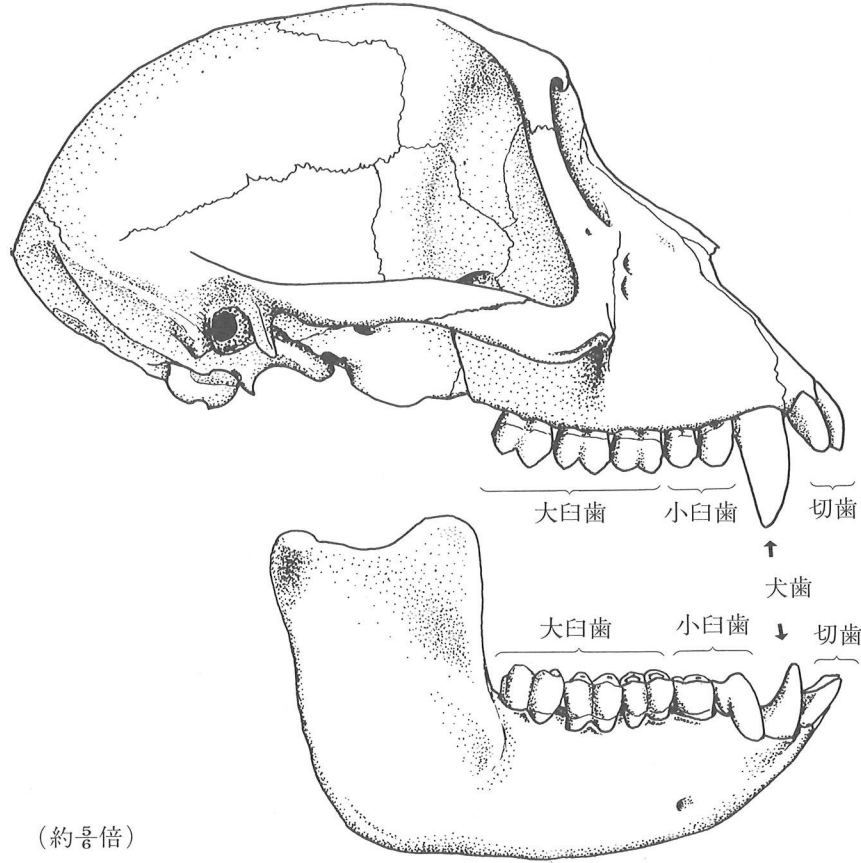


右下あご



(1.5倍)

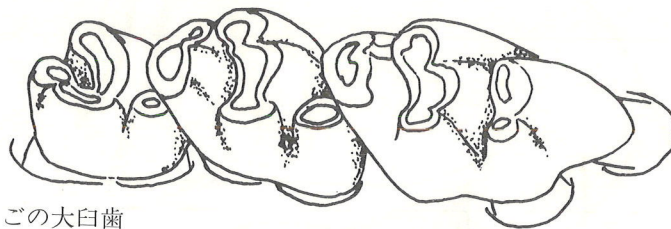
歯の数は、わたし私たちヒトとまったく同じです。形もよく似ています。しかし犬歯は大きく、とくにオスの上の犬歯は大きくて、これと下の第1だい小白歯しょうきゆうしとが、はさみのようにかみあつて、イヌやライオンの臼歯のような切りさくはたらきをしています。



(約 $\frac{5}{6}$ 倍)

クマネズミ げっしもく (齧歯目) 何でも食べる

歯式 $\frac{1 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 3}{1 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 3}$



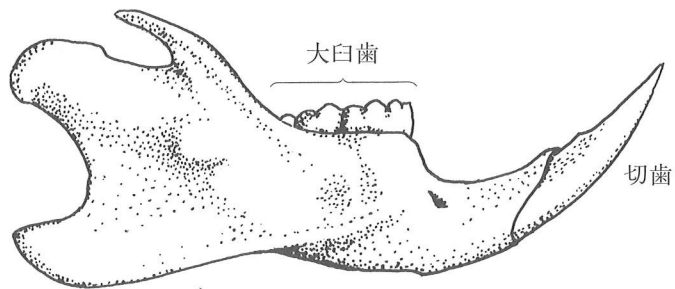
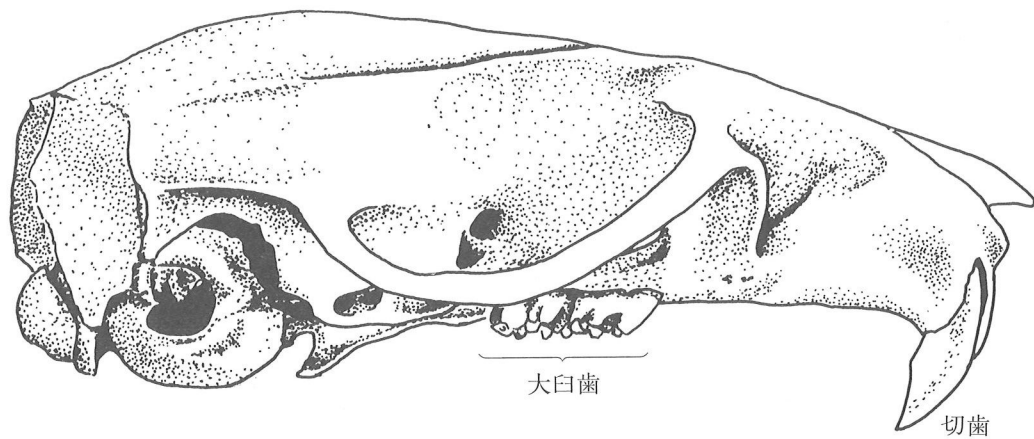
右上あごの大白歯

右下あごの大白歯



(約13倍)

上下の切歯には根がなく、一生のびつづけます。この歯で、何でもガリガリかじってしまいます。いつもすれ合^あって、とがれるため、ノミのようにするどく、とがっています。臼歯^{きゆうし}は、いくつかの高まりが、前後に並んだ形をしています。

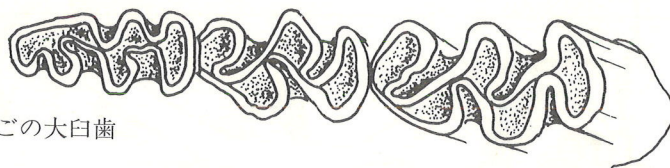


(約3.5倍)

↑
下あごの切歯の根はこの辺までのびている

スミスネズミ (げっしもく) 齧歯目 植物を食べる

歯式 $\frac{1 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 3}{1 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 3}$



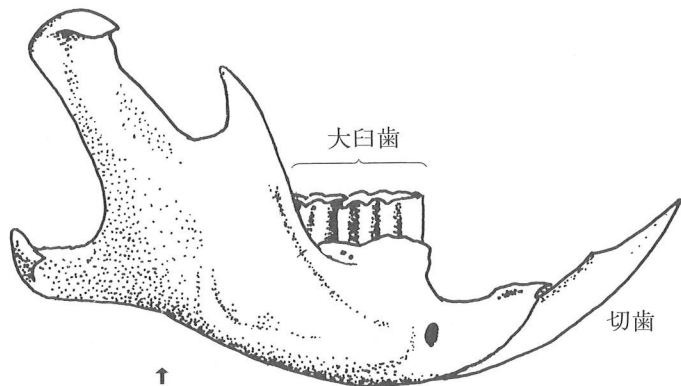
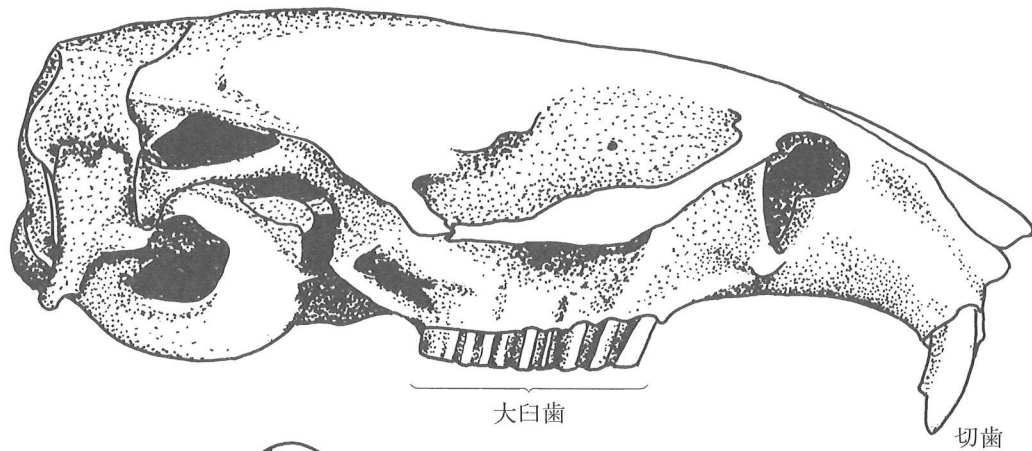
右上あごの大白歯

右下あごの大白歯



(約15倍)

臼歯きゆうしのエナメル質しつには、上下にはしる、たくさんのひだが見られます。咬合面こうごうめんでは、すりへったエナメル質が、たくさんの三角形をえがいています。これは、植物しよくぶつをすりつぶすのに、つごうのよい形です。臼歯せつしも切歯と同じように、根が無く、一生いつしやうのびつづけるので、歯がすりへっても平気です。



(約5.3倍)

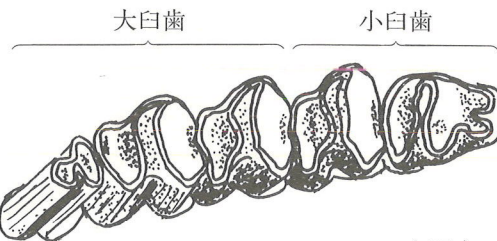
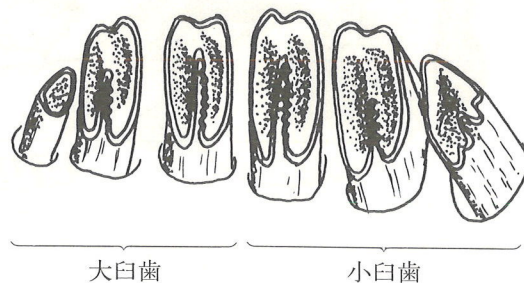
↑
切歯の歯根はこの辺までのびている

ノウサギ (うさぎもく) 植物を食べる

歯式 $\frac{2 \cdot 0 \cdot 3 \cdot 3}{1 \cdot 0 \cdot 2 \cdot 3}$

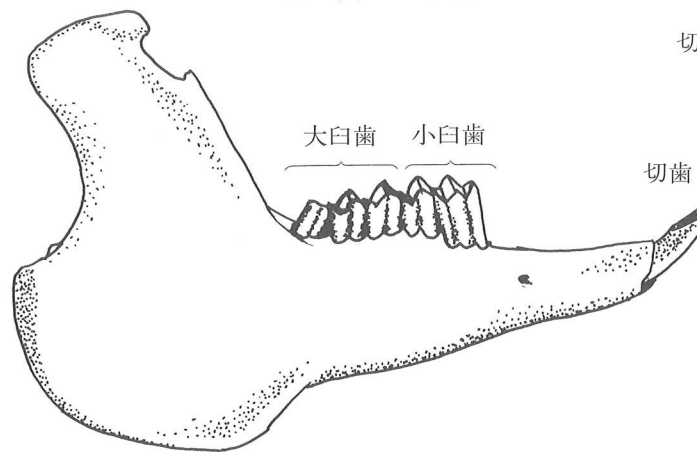
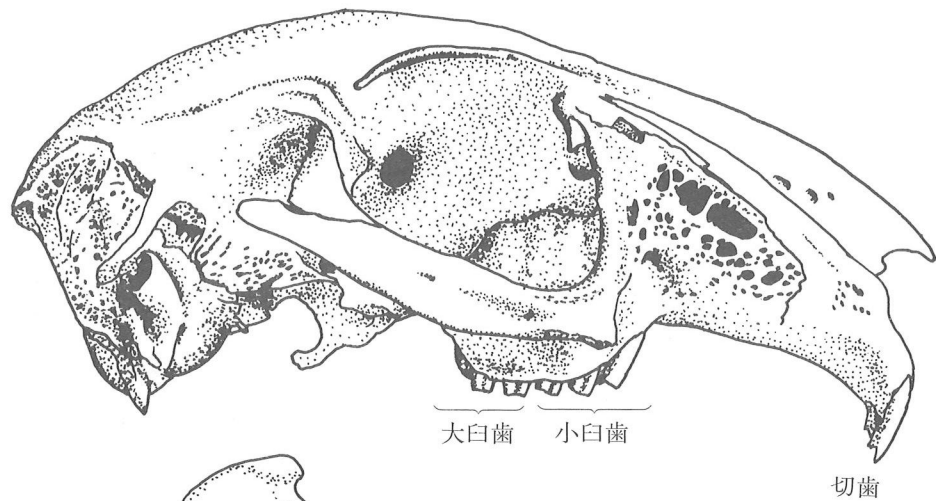
ウサギのなかまは、ネズミのなかまに大変よく似た切歯をもっています。しかし、ネズミとちがって、上の切歯が左右に2本ずつ、合計4本あります。下の切歯と、上の切歯のうち前にあるものとは、大きくて、とてもすどく、のみのような形です。臼歯も切歯も無根歯で、一生のびつづけます。だから、かたい草を食べて歯がすりへっても平気です。いちばん前の小白歯と、いちばん後の大白歯をのぞくと、ほかの臼歯はみんな、大変よく似た形をしています。

右上あごの臼歯



(約4倍)

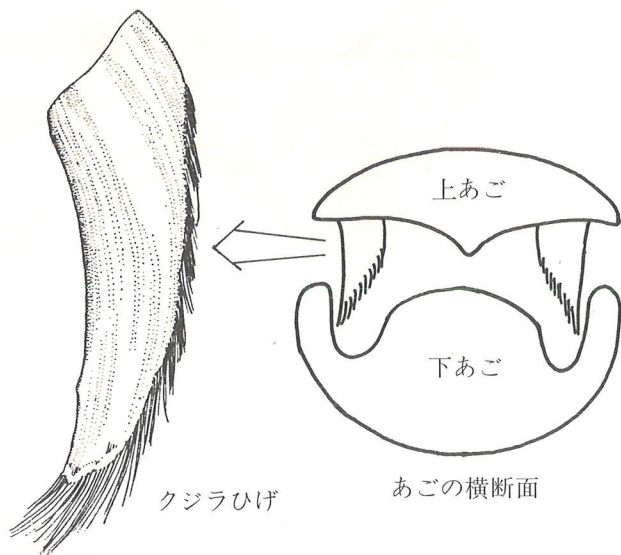
右下あごの臼歯

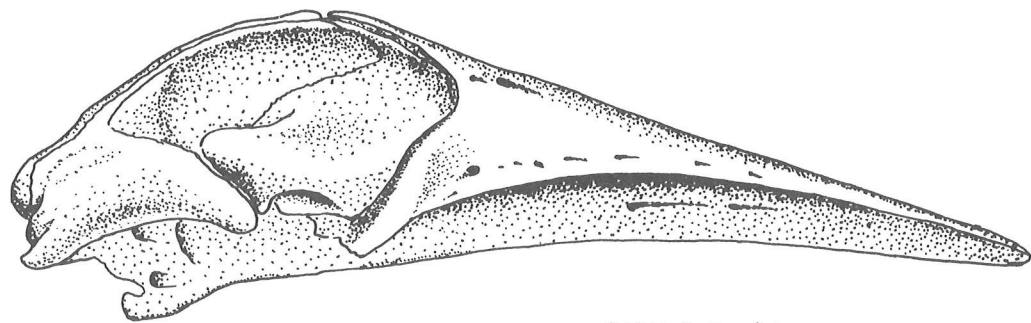


(約1.5倍)

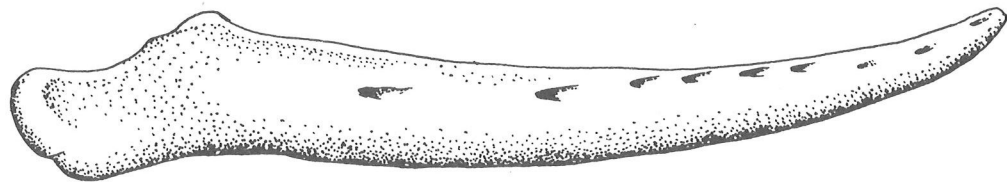
イワシクジラ (くじらもく) こうかくるい 甲殻類や魚を食べる。

鯨のなかまは、ひげ鯨類と、はくじらるい 齒鯨類に分けられます。齒鯨類には歯がはえていますが、ひげ鯨類には、歯はありません。イワシクジラは、ひげ鯨の一種です。ひげ鯨には、歯のかわりに「クジラひげ」がはえています。「クジラひげ」は、ヒトの上あごにあるひだと同じものです。ひげ鯨は、えさと海水とをいっしょに口にふくみ、した舌で海水をおし出して、えさだけを「ひげ」でこして、食べます。ひげ鯨のなかまでも、生れる前には、歯のものと(齒胚)しはいができています。ところが、生れるまでに、齒胚は全部なくなってしまいます。一度齒胚ができるということは、ひげ鯨類も、歯のはえた鯨から進化してきたということを示しています。





歯ははえていない

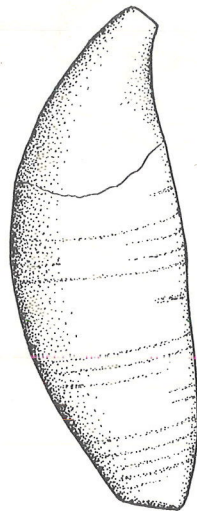


(約 $\frac{1}{20}$ 倍)

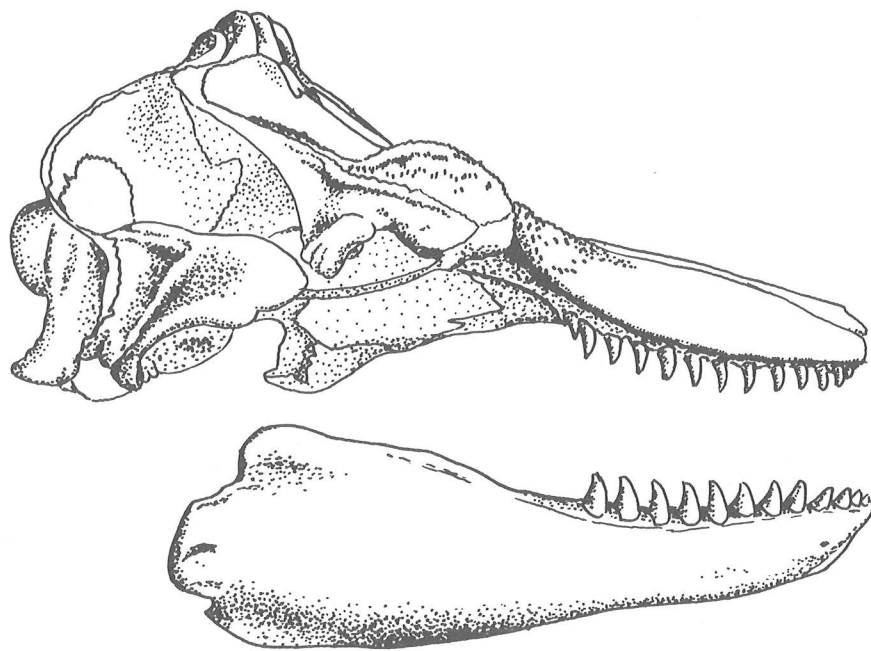
シャチ^(くじら目) 魚や海にすむ^{ほじゅうるい}哺乳類(けもの)を食べる

歯式 $\frac{12}{12}$

シャチは、^{はくじらるい}歯鯨類の中でも^{だいひょうてき}代表的な^{しゆるい}種類です。歯の長さは10~13cmもあり、その $\frac{1}{3}$ くらいが歯ぐきの外に出ます。イルカ類をはじめ、ほかの歯鯨の歯は、えものをとるのに使われるだけで、かみくだくことはできません。丸のみにしています。ところがシャチは、歯でえものをひきさいたり、かみくだくことができます。切歯や、臼歯の区別はできないので、歯式は、上下のあごとも、左右に、12本ずつ歯がはえている、つまり全部で48本ということを示しています。



シャチの歯。左が前(約 $\frac{2}{3}$ 倍)

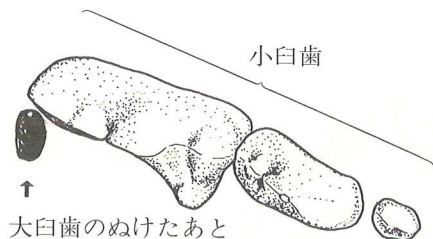


(約 $\frac{1}{9}$ 倍)

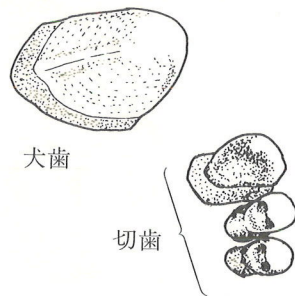
ライオン しよくにくもく (食肉目)

肉を食べる 歯式 $\frac{3 \cdot 1 \cdot 3 \cdot 1}{3 \cdot 1 \cdot 2 \cdot 1}$

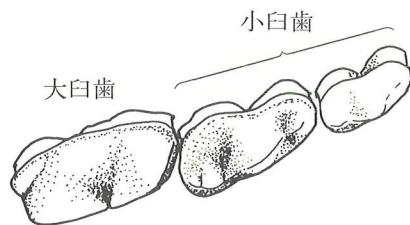
上あごのいちばん後のしょうきゆう小白歯と、下あごのだい大白歯が、大きくするどい、肉を切りさく歯になっています。上あごのもう1本の小白歯と、下あごの小白歯も、そのはたらきを助けています。イヌのような、かみくだくための歯はありません。まったく肉を食べるためだけの歯になっています。ネコは、ライオンに比べれば、とても小さい動物ですが、歯の形とはたらきは、ライオンとそっくりです。



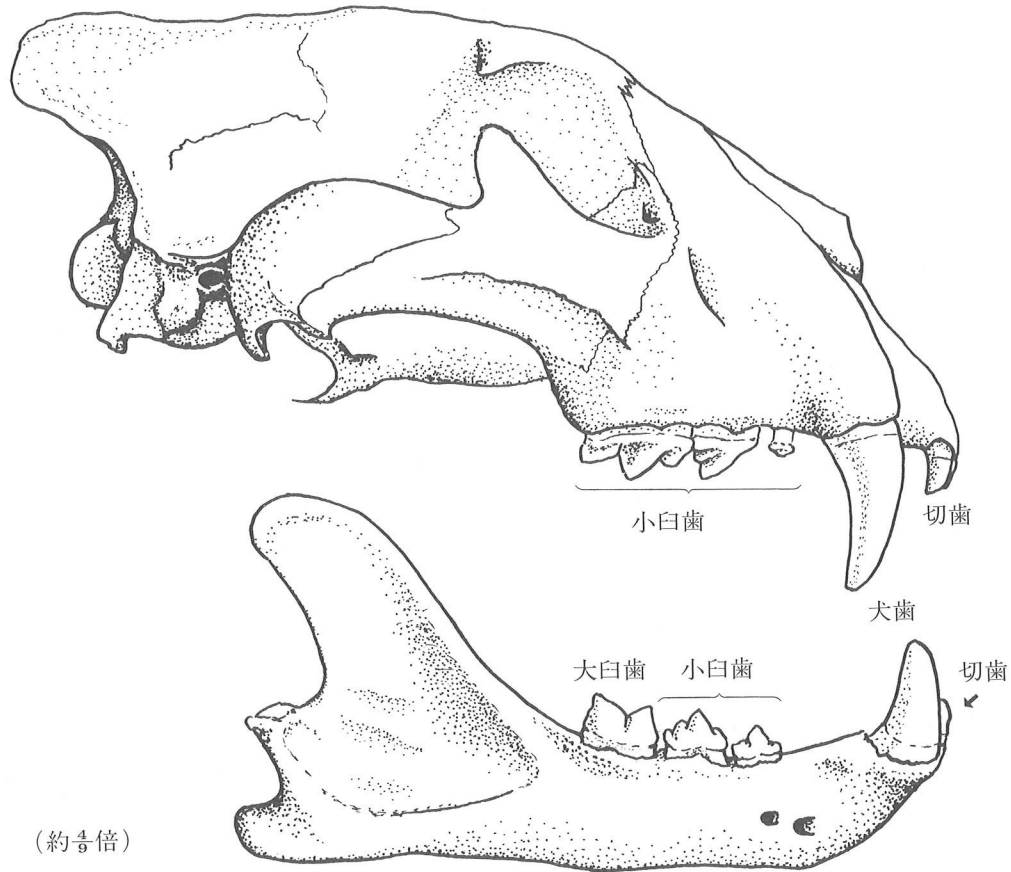
右上あご



右下あご



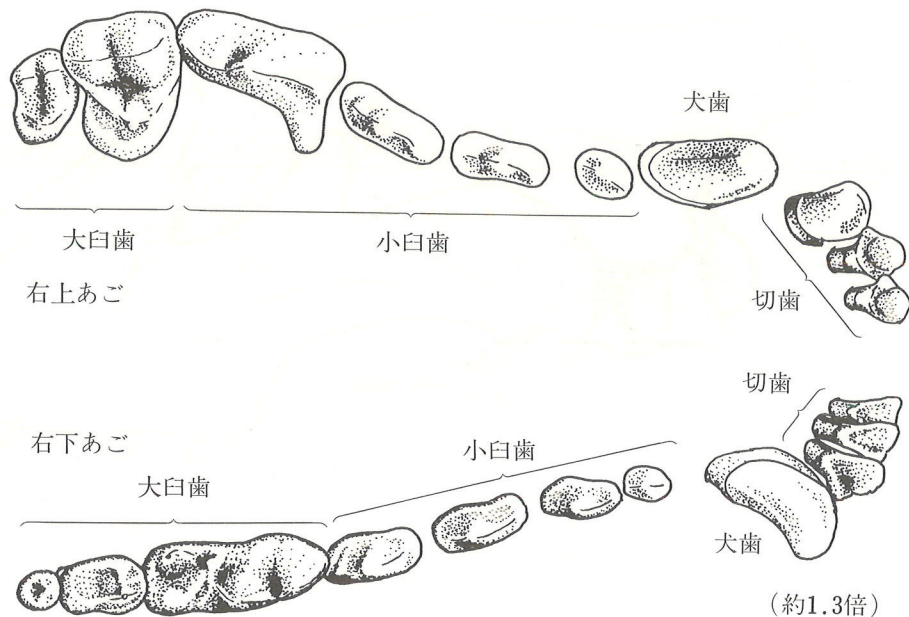
(約 $\frac{8}{5}$ 倍)



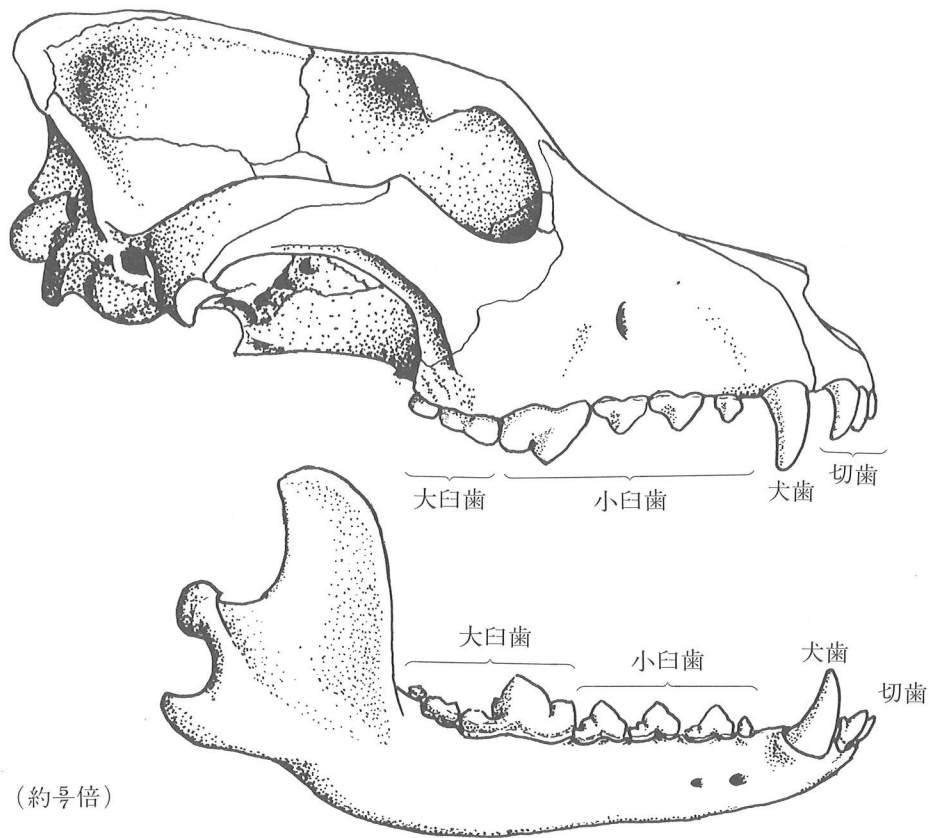
イヌ (食肉目)

主に肉を食べる

歯式 $\frac{3 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 2}{3 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 3}$



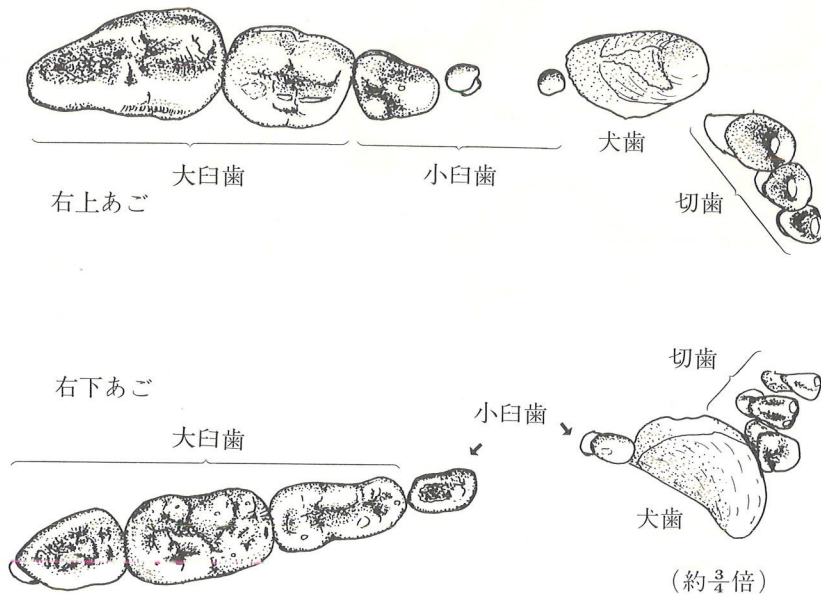
上あごの第4小^{だい}白^{しょう}歯^{きゅうし}と、下あごの第1大^{だい}白^{はく}歯^しが、大きくてするどくとがっており、はさみのようにすれちがい、肉を切りさく^{はたら}働きをします。他の大^{だい}白^{はく}歯^しは、あまりとがっておらず、かみくだくはたらきをしています。小^{しょう}白^{はく}歯^しは、単^{たん}純^{じゆん}な形です。犬^{けん}歯^しは大きくて、えものを攻撃^{こうげき}し、とらえるための武器^{ぶき}になっています。イヌは、ネコのなかまほど、肉食^{にくじ}だけにかたよっていないので、白^{はく}歯^しの数は、あまり少^{すく}なくな^なっていません。



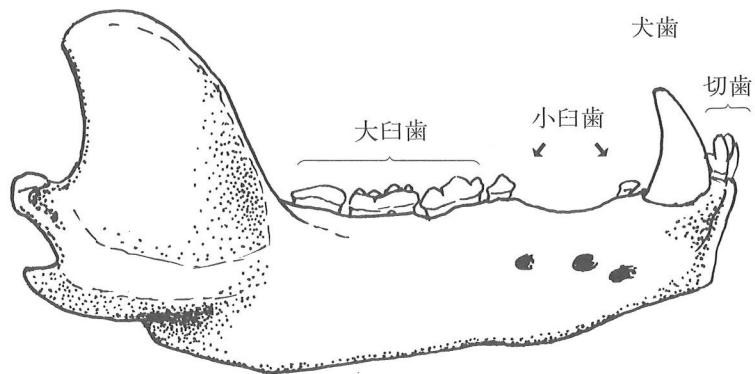
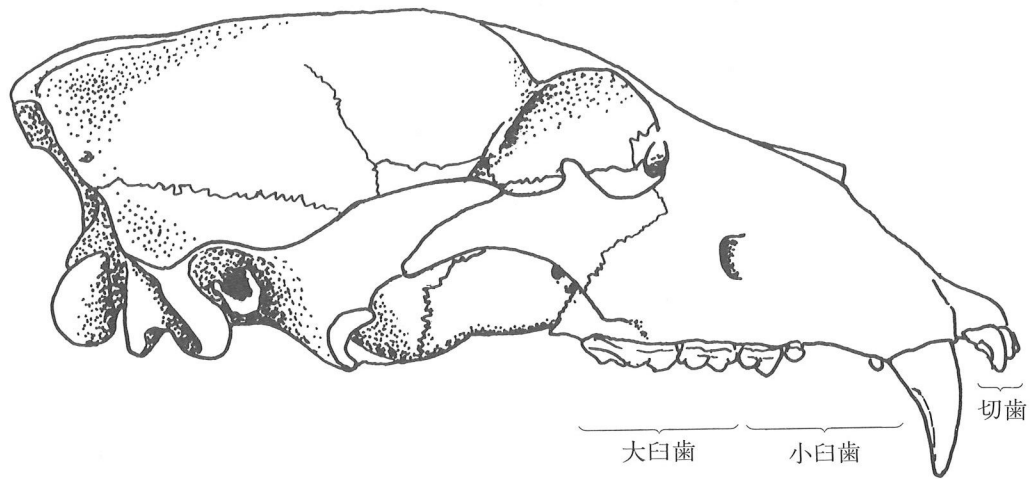
(約 $\frac{5}{7}$ 倍)

ヒグマ (食肉目) 何でも食べる

歯式 $\frac{3 \cdot 1 \cdot 3 \cdot 2}{3 \cdot 1 \cdot 2 \cdot 3}$



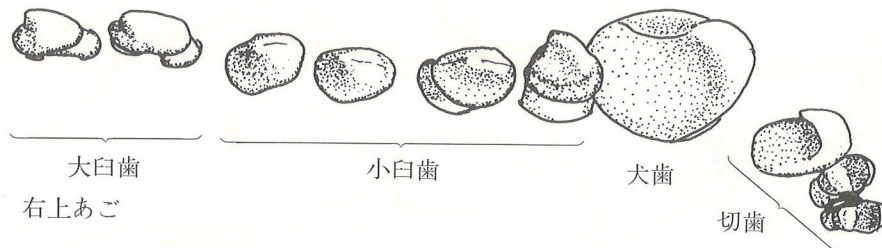
クマの仲間^{なかま}は、イヌやライオンと同じ食肉目^{しよくにくもくぞく}に属しますが、雑食性^{ざつしよくせい}です。大白歯は大きくて、広い咬合面^{こうごうめん}をもっており、食べ物をかみくだくの^{てき}に適しています。ライオンやイヌのような、するどくとがった、肉をかみ切るための臼歯^{うすば}は持っていません。



(約 $\frac{2}{3}$ 倍)

オットセイ (しよくにくもく) 魚などを食べる

歯式 $\frac{3 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 2}{2 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 1}$



大白歯
右上あご

小白歯

犬歯

切歯

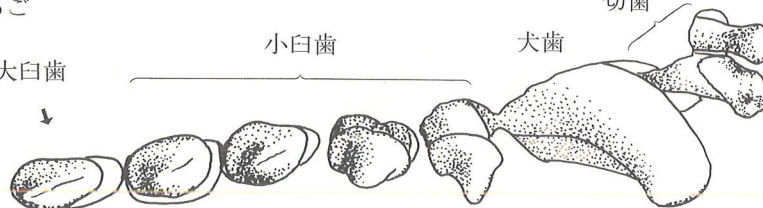
右下あご

大白歯

小白歯

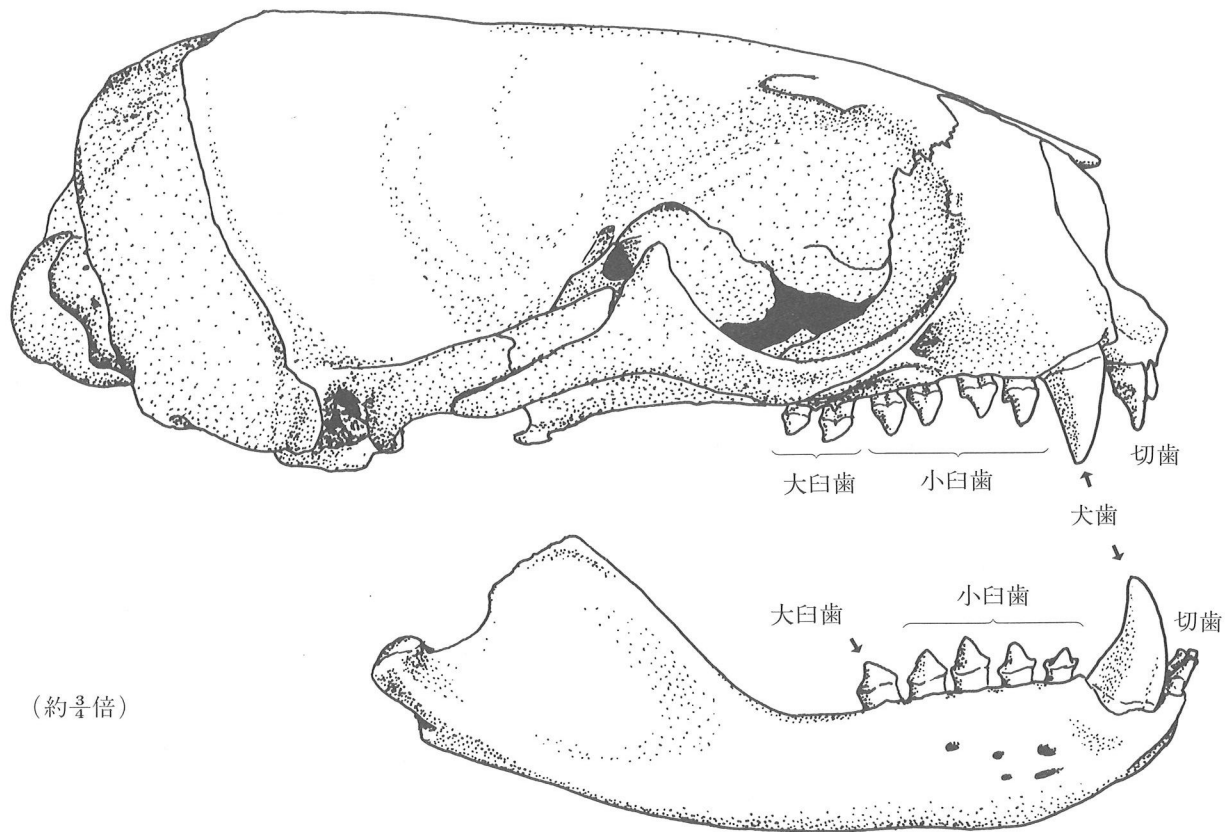
犬歯

切歯



(約1.7倍)

魚や、イカ、タコなどを食べています。しかし、えものをかみくだいたり、すりつぶしたりすることはせず、丸のみしてしまいます。歯はえものをとらえ、くわえる働きをするだけですが、たんじゆん えんすいけい歯はすべて単純な円錐型で、しょうきゆうし だいきゆうし小白歯も大白歯も同じ形です。



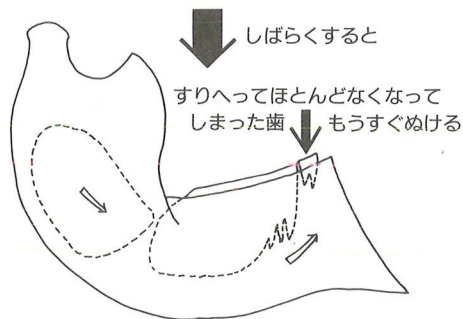
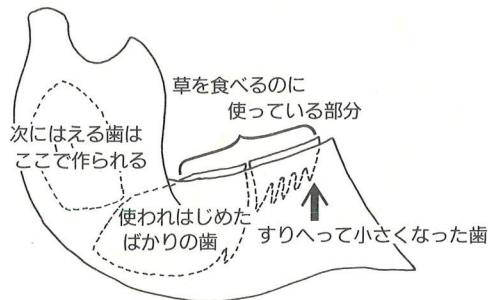
(約 $\frac{3}{4}$ 倍)

マンモスゾウ (長鼻目) 草を食べる

歯式 $\frac{1 \cdot 0 \cdot 3 \cdot 3}{0 \cdot 0 \cdot 3 \cdot 3}$

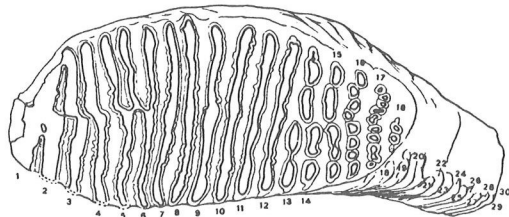
ゾウのなかまは大きな体で、とてもたくさんの草を食べるため、臼歯は大きく、変った形をしています。エナメル質のうすい袋の中に象牙質をつめてたくさん並べ、セメント質でかためたようなものです。すりへった咬合面には、横長のエナメル質の輪が前後にたくさん並んで、とび出しています。下あごを前後に動かして、草をすりつぶします。はえかわり方が、普通のけものちがうことも、大きな歯もっていることと、関係があるのでしょう。牙は犬歯でなく切歯で、一生のびつづけます。そして、けもの歯の中で最大のものです。

マンモスゾウは、アフリカゾウやアジアゾウにくらべると、臼歯のエナメル質が薄く、咬合面にはより多くのエナメル質の輪が並んでいて、かたい草を食べるのに、むいています。

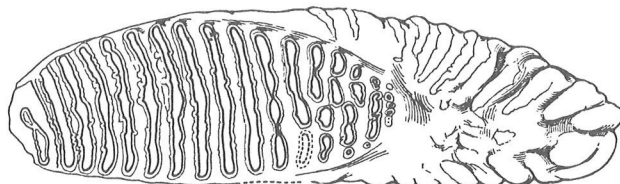


ゾウの臼歯のはえかわり方

左上第3大白歯
(左側面)

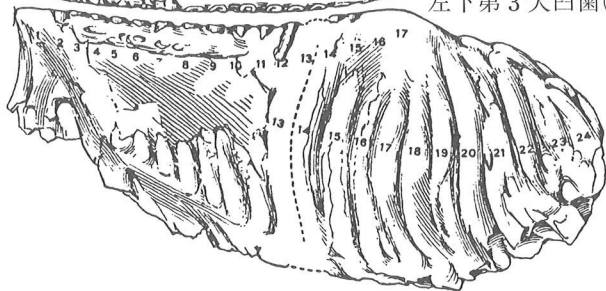


左上第3大白歯(咬合面)

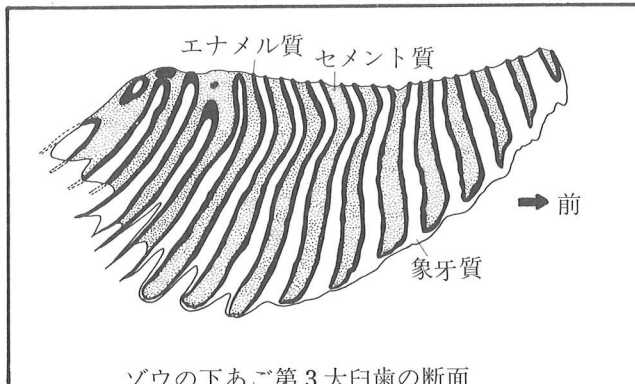


左下第3大白歯(咬合面)

左下第3大白歯(左側面)



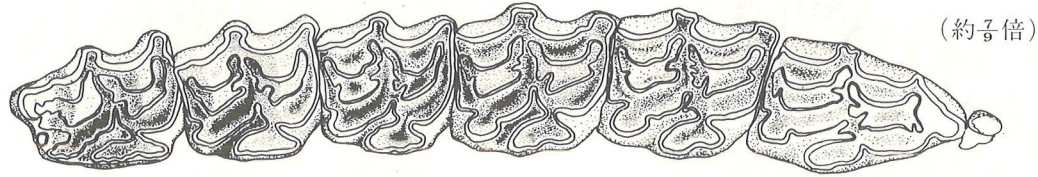
マンモス象の第3大白歯、Osborn(1942)による
(すべて左側が前、約3倍)



ゾウの下あご第3大白歯の断面

ウマ (奇蹄目) 草を食べる

歯式 $\frac{3 \cdot 0 - 1 \cdot 4 \cdot 3}{3 \cdot 0 - 1 \cdot 3 \cdot 3}$ (犬歯は雄だけにある)

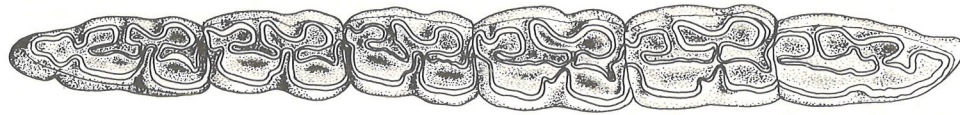


右上あごの臼歯

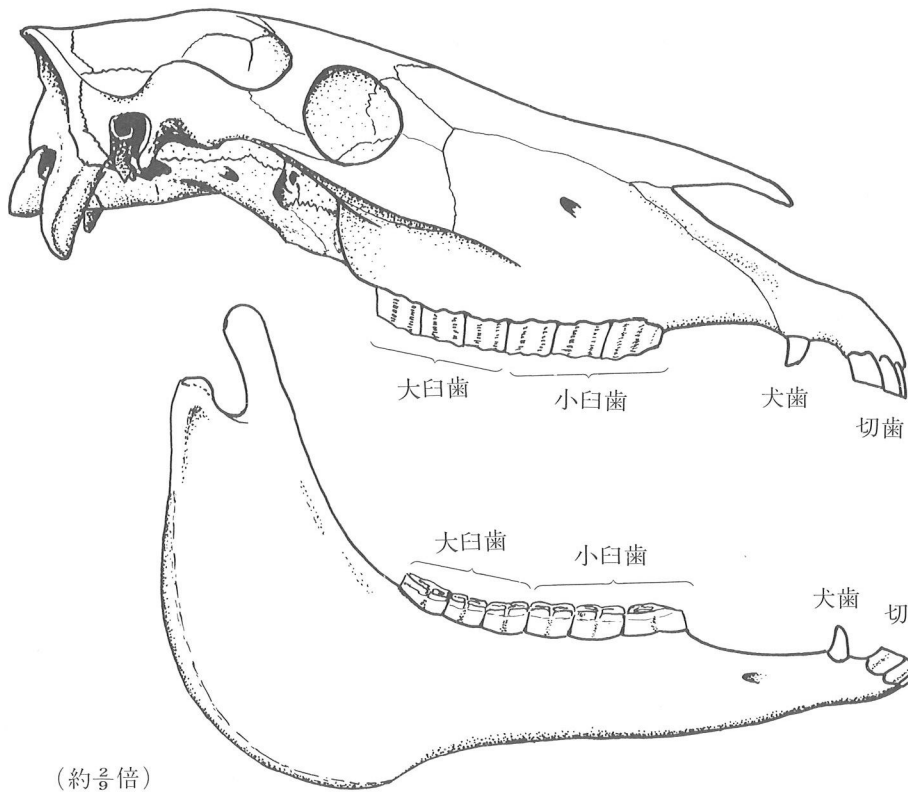
大白歯

小白歯

右下あごの臼歯



臼歯の歯冠はとても高く、若い時には歯根ができず、すりへった分だけ歯冠がつけ加わります。そして年をとってから歯根ができます。草を食べてすりへると、臼歯の咬合面ではエナメル質が、とても複雑なもようを作ります。上あごのいちばん前の小白歯をのぞくと、小白歯も大白歯と、よく似た形で草をすりつぶすための面は、とても広くなります。切歯は草をはさんで、かみ切る形になっています。切歯の咬合面のもようや形は、年をとるにつれて変わるので、切歯を見ると、その馬が何才くらいか、わかります。



右上あごの臼歯(右側面)



右犬歯 左犬歯

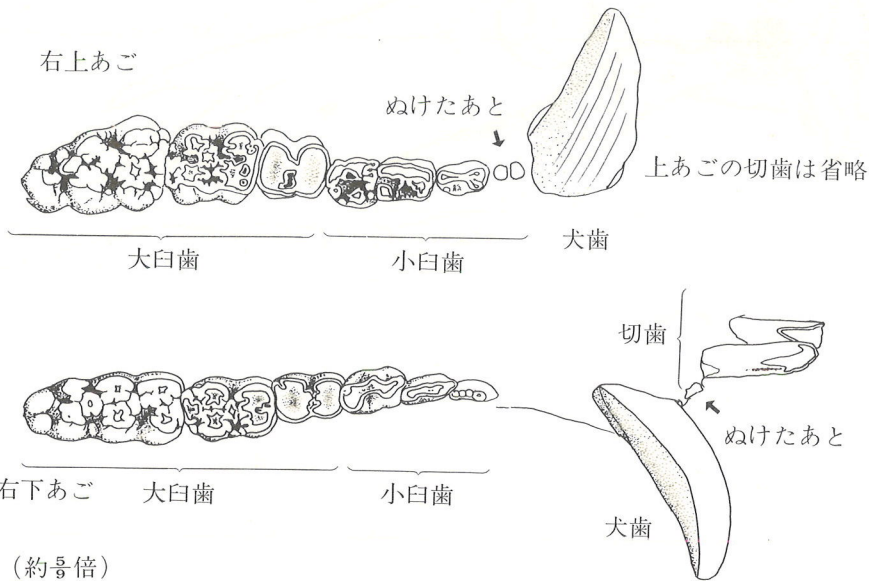


上あごの切歯と犬歯(咬合面)

イノシシ (偶蹄目) 何でも食べる

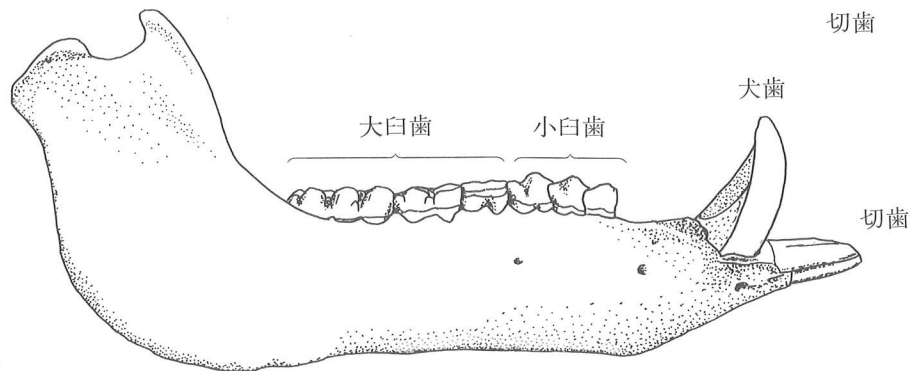
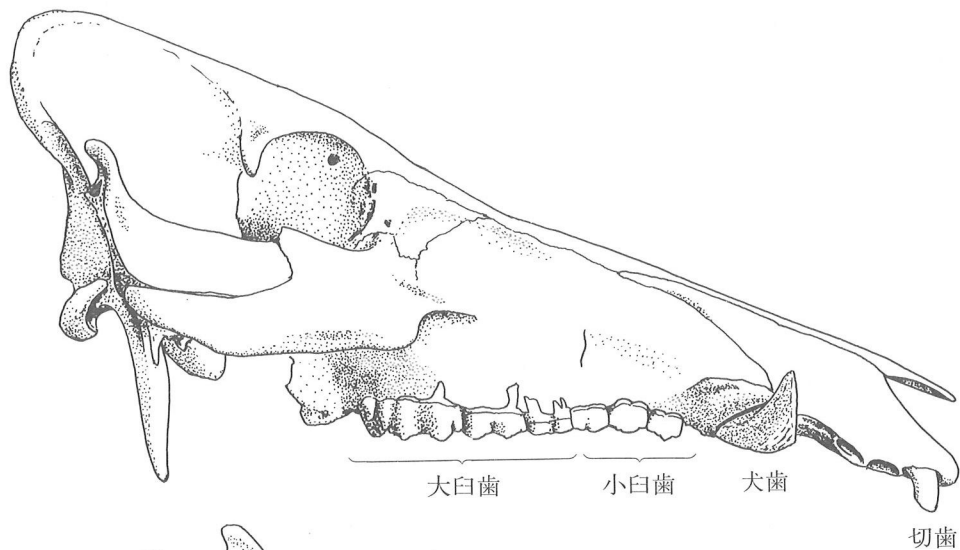
歯式 $\frac{3 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 3}{3 \cdot 1 \cdot 4 \cdot 3}$

しょうきゆうし
小臼歯のうち前の方の歯は、左右にうすくて、かみ切るはたらきをします。ほかの小臼歯と大白歯は、ヒトの臼歯を複雑にしたような形で、たくさんのこぶが並んでいます。下



(約5倍)

あごの切歯は前を向いていて、土を掘って食べ物をさがすのに、適しています。上下の犬歯は、すれ合って、みがかれるため、下あごの犬歯はととてもするどくとがっています。イノシシが敵とたたかうのに、犬歯はととても強力な武器です。

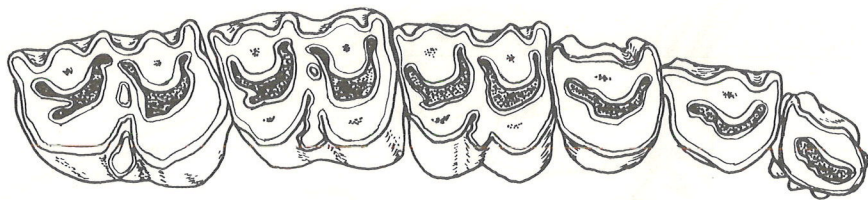


(約 $\frac{3}{8}$ 倍)

ウシ ぐうていもく (偶蹄目)

草を食べる

歯式 $\frac{0 \cdot 0 \cdot 3 \cdot 3}{3 \cdot 1 \cdot 3 \cdot 3}$



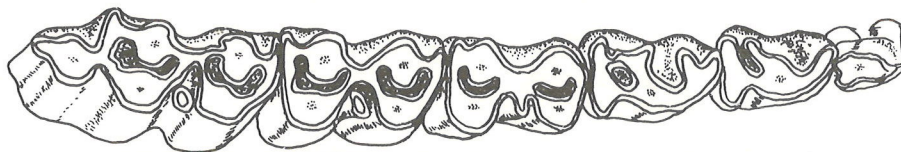
右上あごの臼歯

大臼歯

小臼歯

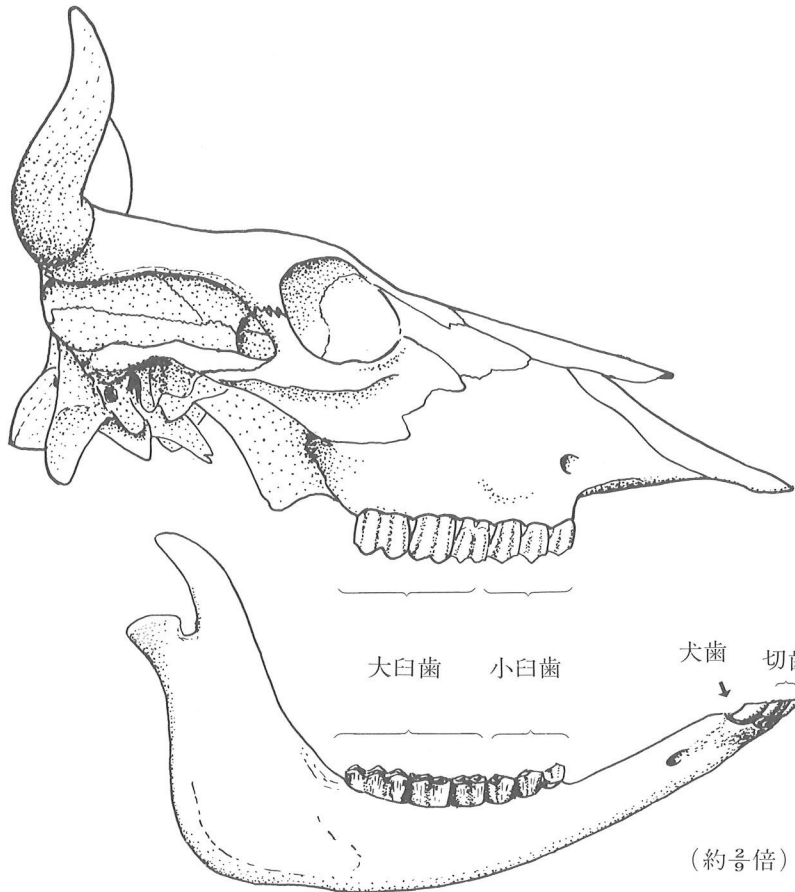
右下あごの臼歯

臼歯の歯冠は高く、すりへると、咬合面にエナメル質がとび出して、三日月型のもようができます。あごは左右に動いて、草をすりつぶ

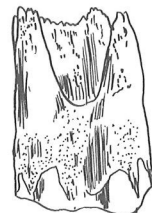


(約 $\frac{2}{3}$ 倍)

します。上あごには切歯と犬歯はなく、あごの前の方は、かたい肉質の板になっています。ウシはこの板と、下あごの切歯と犬歯で草をはさんで、ちぎるように入れて口に入れます。歯よりやわらかい、肉質の板とかみうため、下あごの切歯と犬歯は、あまりすりへることはありません。ウマの切歯より、草をくいちぎるにおいて、進んでいると言えるでしょう。



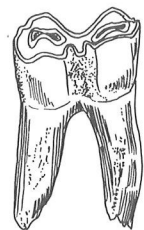
右上あごの大白歯
(右横から)



すりへったもの



右下あごの大白歯
(右横から)



すりへったもの

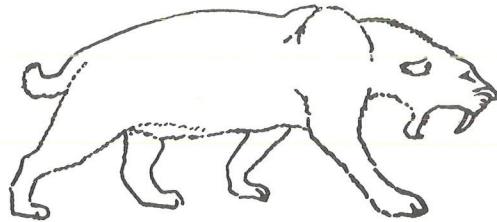
表紙の絵：スミロドンの頭骨^{とうこつ}

絶滅^{ぜつめつ}してしまった大きなネコのなかまに、サーベルタイガーとよばれる、とても長い^{きば}牙をもったグループがあります。スミロドンはその代表で、鮮新世^{せんしんせい}から更新世^{こうしんせい}に、アメリカ大陸^{たいりく}にすんでいました。犬歯^{けんし}は見えている部分だけで20cmくらいあります。

スミロドンは、がっしりした骨格^{こつかく}をもっている^{びん}ので、あまり敏^{びん}しょうな動物ではなかったと、考えられます。たぶん、速^{はや}く走る動物をおそうことはむつかしく、大きくて動きの^{たいじゆう}に^{たいじゆう}ぶい動物を、えもの^{たいじゆう}にしていた^{たいじゆう}のでしょう。えものにとびかかると、体重と前足の力も利用しながら、長い牙をえもの^{たいじゆう}の体に打ちこんだのでしょう。首と頭の^{ほね}骨も、牙をうちおろす強い^{きんにく}筋肉がつくの^{ほね}に、

つごうのよい形をしています。それに対し、トラやライオンなど^{ほんとう}本当のネコのなかまでは、^{ていど}程度^さの差はありますが、動きの速い動物をおそうような体になっています。

サーベルタイガーがえもの^{たいじゆう}にしていたゾウやオオナマケモノなど、大型のけものは、更新世のおわりころに次つぎと絶滅してゆきました。サーベルタイガーも同じころ^{すがた}地上から姿^{すがた}をけしてしまいました。



大阪市立自然史博物館 ミニガイド No.3

けものの歯

1986年11月15日発行

文・絵 樽野博幸

編集・発行 大阪市立自然史博物館

〒546 大阪市東住吉区長居公園1-23

印刷所 光栄堂印刷株式会社

